報告３

甲府城下町の形成と変遷

甲府市教育委員会　佐々木　満

はじめに

永正16年（1519）に武田信虎によって造営された武田氏館と、その周辺に集住を命じられた国衆の屋敷地を母体として城下町「甲斐府中」が成立した。天正９年（1581）に武田勝頼による新府移転で一時的に府中機能を失うが、中世城下町は、武田氏滅亡後も甲府城下町に編入されるまで存続した。

一方で、近世には甲府城を中心とする甲府盆地とは異なる統治体制で郡内地域の支配が確立し、谷村城と谷村城下町が形成された。近年、谷村城に関わる発掘調査が実施され、その一端が明らかにされたており、甲斐国内の城下町を比較する上で甲府城下町の形成過程と変遷を紹介する。

１．甲府城下町の形成

甲府城築城には諸説あるが、武田氏館跡の発掘調査により、加藤光泰が領主であった文禄２年（1593）段階までは武田氏館跡が拠点であったと考えられる。甲府城築城が本格化したのは、甲府城跡発掘調査成果が示すとおり、浅野長政・幸長親子の時期と推測される。

甲府城は、内郭を囲む内堀と、その外側の武家屋敷を囲む二の堀、商工人地を囲む三の堀で形成された。そのうち、甲府城北側は、武田氏時代の中世城下町が再編成され、南側には碁盤の目状の街区が整備された新しい城下町が誕生した。現在、遺跡としては、二の堀・三の堀内とその周囲に展開した城下町域を甲府城下町遺跡として調査対象としている。

２．初期甲府城下町の姿を探る

甲府城築城と同時に城下町の整備も浅野氏が推し進めたと考えられる。築城当初の城下町がどのような姿であったか、記録も少なく、詳細は定かではないが、江戸前期と考えられる京都大学所蔵「甲府城並近辺之絵図」では、江戸後期と比べ、基本的な街区に大きな変化はないものの、甲州街道の位置は現在知られているルートとは異なる。

甲州街道が分岐する甲府市中央２・４丁目付近で実施された発掘調査で変遷を確認する機会があった。分岐点の調査区下層から初期の金座の可能性がある遺構・遺物が検出されるとともに、同地点から南へ50ｍほど下った柳町の宿場町であった地点の下層からも金属生産・加工に係る遺構・遺物が検出された。

このことから、初期の甲府城南東の二の堀外付近には、寛永13年（1636）前後に甲州街道のルートが変更されて柳町宿が整備されるまで、金属加工に係る職人町が形成されたことが明らかになった。位置的に甲府城鍛冶曲輪との関係も考慮していかなければならないが、いずれにしても、甲州街道の付け替えが城下町の形成と変遷に与えた影響は大きいと考えられる。

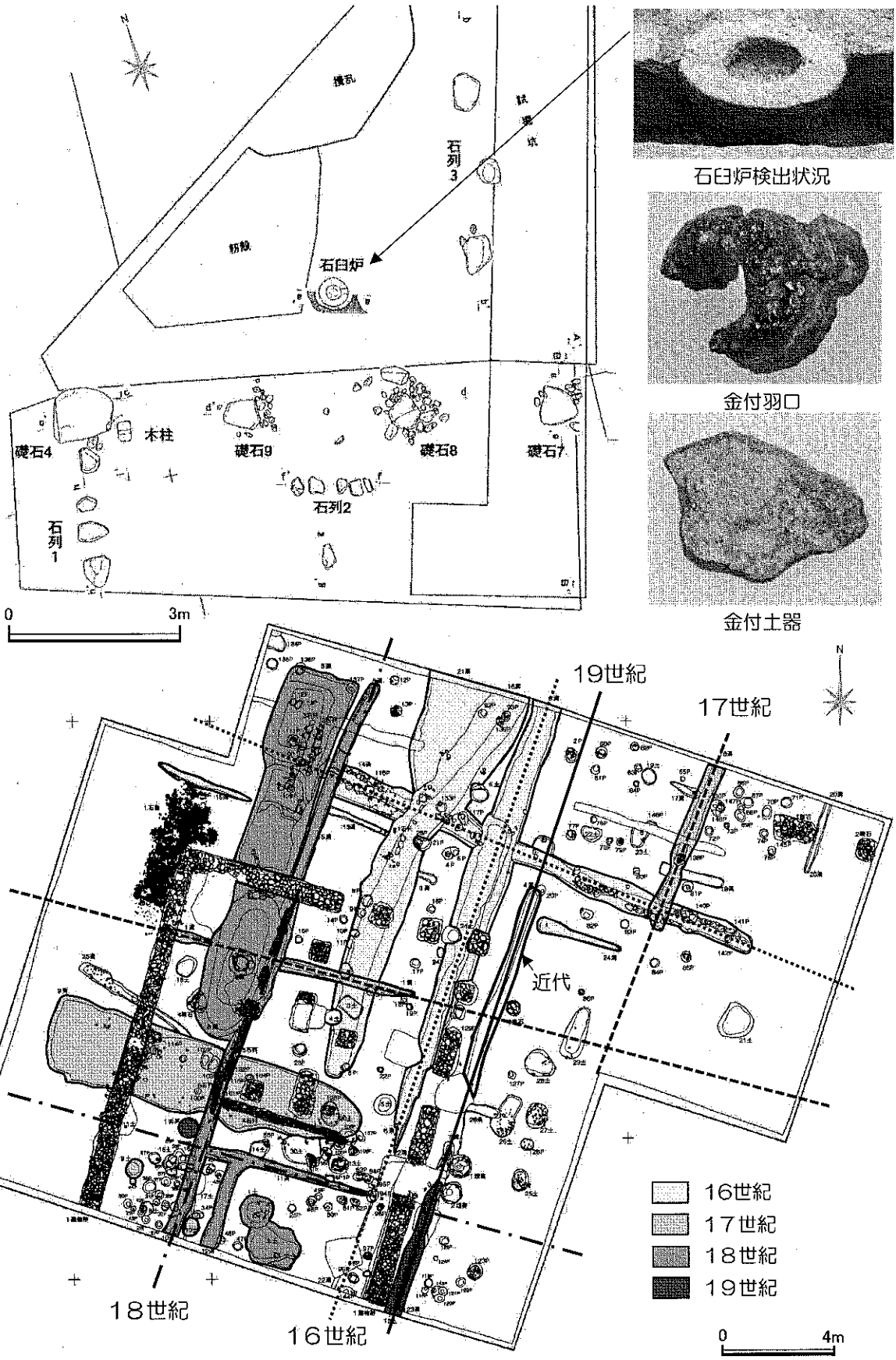
３．甲府城下町の活況

柳澤氏入国以前の様子を『裏見寒話』では「万事不自由」で、品質・品揃えも悪かったものの、柳澤氏入国後は不自由がなくなったと記述している。『兜嵜雑記』にも「是ぞ甲府の花盛り」と表現され、活況を呈した様子が窺えるが、記録のとおり、柳澤氏領有による変化を遺跡から読み取れるだろうか。

甲府駅周辺の区画整理に伴う発掘調査では、屋敷地を復元できる事例はないものの、中世城下町と重複する北口地点では、溝跡など遺構の配置と変遷から、都市軸は基本的に中世の軸線を踏襲したことが判明した。出土遺物では陶磁器の出土量が17世紀末から18世紀初頭を境に増加し、甲府近郊村落でも同様の動きがあるため、物流と消費に変化が生じたと考えられる。

18世紀後半ではあるが、武家の生活を知る面白い事例では、底部に埋桶が設置された遺構が３基検出されている。底面の埋桶は魚溜りの可能性があり、観賞魚を飼育していた池跡の可能性がある。このほか、鳥の餌鉢や玩具など嗜好品が出土するため、江戸後期の文化が成熟期を迎え、18世紀以前の生活に事欠く不自由な暮らしから、個人差はあるものの、余暇を楽しむゆとりが出てきた暮らしを垣間見ることができる。

まとめ

近年の甲府城下町遺跡の発掘調査成果により、寛永13年前後の甲州街道の付け替えに伴う宿場整備に起因した都市機能の変更と、甲府城築城により整備された都市基盤は、現代の市街にも継承されるが、北口付近の状況から判断すると、現代都市基盤の源泉は、中世段階に遡ることが明らかになった。

また、18 世紀に入ると出土遺物の質量が増加し、生活水準の向上による嗜好物が遺跡でも確認できるようになるため、柳澤氏入国がその後の城下町に与えた影響は大きかったと考えられる。